

国立民族学博物館の収蔵品②

ソースコミュニティと博物館資料との「再会」



写真1 民博スタジオでの資料熟覧 (H12294)。2015年4月23日、伊藤敦規撮影



写真2 ソースコミュニティの地元でデジタル画像を用いた熟覧も行っている。2017年1月18日、伊藤敦規撮影

国立民族学博物館(民博)は、二〇一四年にフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトという研究活動を開始した。研究者とソースコミュニティの人々(博物館資料の制作者、使用者、その子孫)からなる国際共同研究を組織し、資料の高度情報化と資料利用に関する協働環境を整備する試みである。すでに強化型プロジェクト(二年)及び開発型プロジェクト(四年)十数件に着手している。筆者は初年度から開発型プロジェクト全体の意義を紹介したい。

「北米先住民民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」と題したプロジェクトは、日米英の博物館等が収蔵する約二五〇〇点の先住民製資料を対象とする。ソースコミュニティに飛行機に搭乗してもらい、各地の博物館を訪れ、資料一点一点をハンドリングしながら地元の文脈に沿って解説してもらおう。この資料熟覧調査はモノと資料台帳の記載内容を確認してもらおうばかりか、それを実際に使用した思ひ出や、制作上の注意点、材料調達の仕事や変遷、地元の呼

称、制作者情報、宗教儀礼具の場合は特別な取り扱い方の指南や利用制限の要望(カルチャル・センシティブティへの配慮)を語ってもらう。既存の台帳項目に単語レベルで情報を加筆するのではなく、熟覧者の身振りや抑揚を含めた語りとモノの存在との不可分リアルな関係を重視している。また、文字起こした動画は熟覧者と一緒に確認している。この協働編集も公開適正化作業として重要な意義を持つ。過去のいかなる資料ドキュメンテーションとも異なる方法論を採用することで、博物館資料管理におけるソースコミュニティのプレゼンスを格段に高めながら、唯一無二の情報の高度化を果たしている。

民族学博物館は、世界の民族集団の生活や文化などを自国に居ながらにして理解を促進する目的で設置されてきた。そのため主たるオーディエンスはどうしても来館可能な圏域に居住する人々となる。しかし今日では、ある程度の条件が整えば、展示(研究)される側の人々が外国の博物館を訪問することも可能であるし、彼らの想いに耳を傾けることもできる。本プロジェクトでは各地の博物館で研究者がソー

スコミュニティをホストしながら、博物館資料との「再会」を果たすことを出発点とする。ではプロジェクトの終着点はどうか。それは高度情報化した資料情報をこれまで以上に共同利用に供することである。なによりも重要視しているのは、ソースコミュニティ自身による資料・資料情報の利用を促進させることである。例えば地元アーティストによる創作活動や、伝統文化を語り伝える文化活動の一助となることを想定しながら全体をデザインしている。これを協働環境整備と呼んでいて、現在、従来とは異なるインターフェースのデータベースを開発中である。「再会」の記録としての動画、その語りのテキストデータ(多言語)、フォトVR画像といった、視覚、聴覚、擬似的な触覚などの多感覚を刺激するインターフェースである。人とモノとの「再会」というインパクトを十分に感じてもらえるはずである。

(伊藤敦規)